

実験展示「あるくー身体の記憶ー」の課題

—「展示の無限階梯」への旅立ちへのはなむけとして—

笹原 亮二

「身体技法」を展示するという試み

神奈川大学COEプログラムの一環で行われた実験展示「あるくー身体の記憶ー」展は、「非文字資料のひとつである身体技法を展示する」（中村2008:77）という困難な課題に果敢に取り組んだ試みであった。しかも、観覧者の多くが、自ら体を動かすことを通して、「あるく」という日常的な行為が一種の身体技法であるという事実を改めて意識するに至った（中村ひろ子氏のご教示による）ことは、この展示が目指した、「観覧者ひとりひとりが所有するものでありながら所有が意識されていないことが多い」非文字資料としての身体技法を「身体化された記憶を展示を通して意識化する」「非文字資料の発見」（中村2008:77）という目的が、ある程度達成されたことを示している。

こうした点を考慮すると、今回の展示に対して、基本的には最大限の敬意と肯定的な評価が与えられるべきであろう。その上で、今後そうした展示の試みを更に進めていく際に、検討を希望する問題をいくつか提起することで、この展示の評価という私に課せられた責任を果たしたい。

日常的な行為に潜む身体技法を意識化させる 展示「技法」としての現実的な汎用性

自らの身体性の自覚や再認識を目指した今回の展示は、「文化や伝統とよばれ」、「われわれの生き方を根っこのほうで方向づける生活原理でありながら、外部に向けて自称することの決してない場所」として存在する「つねに意識未満の状態におかれた奇妙な領域」を「民俗」と名付けて（関2002:41）論じてきた民俗学の視角に通じるものであり、それ

がある程度達成されたということは、民俗学を学んでいる私にとって、その意味でも意義深いものであった。

しかし、今回の展示が博物館などの展示「技法」として、どれ程の汎用性を持ち得るかについては議論の余地がある。今回の展示のある程度の成功は、展示のための理想的な映像の作成と使用、また、その効果的な運用を可能とした展示の意匠の洗練度や完成度の高さに拠る部分が少なくないと思われるが、そうした状況の実現のための経済的・人間的な条件の充足が極めて困難なことは、実際の展示制作の現場を想起すれば即座に納得できる。

私の勤務する国立民族学博物館（以下、民博と表記）では、休憩コーナーに世界各地の椅子や寝台を置いている。そこでは実際に座ってみることで、身体的な快適さの感覚に地域や文化毎の相違が存在していることを身をもって知ることができるが、設置の簡便さなどを考慮すると、身体技法の展示「技法」として、今回の展示よりも高い汎用性を有しているとはいえないか。

展示の観覧の強制性と日常的な行為実践という 個人的な体験を巡る主体性

今回の展示と民博の椅子との比較は、展示の観覧者の主体性の在処という問題も顕在化させる。今回の展示で主要な部分を構成していた映像と観覧者の体験という技法は、展示する側が一方向的に設えた、時間的・空間的に固定された同一の形式的なプログラムに従うことを観覧者に要求し、観覧者の選択の余地が極めて少ないという意味で、一定の強制性を有していると見ることもできる。日常的な身体技法は、確かに「生き方を根っこのほうで方向づける生

活原理」としてある種の強制性を有する。しかし、人々は年齢性別や境遇の違いに応じて、物事の行い方や感じ方が微妙に異なることも事実である。個人への注目は、民俗学が、「郷土人の個々の小さき拳動表現、内部感覚の中にも、必ず歴史の痕跡」や「残つてゐる何等かの生活の特徴があり」（柳田 1970b:276-277）、そこから歴史を「各自の郷土に於て、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに学び識らうとする」（柳田 1970a:67）と、個人への主体性に注目してきたことにも通じる。日常的な身体技法の習得や行使が究極的には個人的な実践であることを考えると、観覧者個々の主体性を制限しきれない展示における強制性の存在は、看過できないのではないだろうか。

そうすると、個人が好きな時に好きなだけ、好きな姿勢で身を任せることが許される民博の休憩コーナーの椅子も、「ローテク」の展示ではあるが、「ハイテク・ハイセンス」の展示に必ずしも劣っているとはいえないと考えるのは、単なる身びいきであろうか。

映像技術の進歩は身体技法の 捕捉・提示を巡る問題を解消し得るか？

高度な映像技術を駆使した今回の展示と民博の椅子の比較は、映像技術の進歩は身体技法の捕捉・提示を巡る諸問題を解消し得るかという、更にもう一つの問題を惹起する。

身体技法の一つである芸能を精密に捕捉し、提示しようとする民俗学の試みは、既に戦前に存在した。戦前、日本青年館の「郷土舞踊と民謡の会」に出演した角館の「^{おやま}飾山囃子」に対し、民俗芸術の会の研究者らが調査を行い、文字表現と共に図・写真・楽譜などを駆使し、一定の形式的な身体の動きとして捕捉と提示を試みた（民俗芸術の会 1932）。そこで注目されるのは、「汗の結晶ではあるが、最完全なものとは言へない」（民俗芸術の会 1932:3）・「殆ど徒勞に近い仕事」（竹内 1932:23）・「不明の処が多く」「これ以上には、全く何ともしかたがない」（兼常 1932:32）といった、対象を十分に捉えきれないという否定的な見解が表明されていたことであ

る。こうした彼らの物言いからは、捕捉や提示の技術や実践が精密さを増せば増す程、「何をどのように理解したらそれを理解したことになるのか、何をどのように記述したらそれを記述したことになるのか」（笹原 2003:299）がより先鋭に問われるようになったという、逆説的な状況が浮かび上がってくる。

そうした問いは、ビデオという高度な身体技法の捕捉・提示の技術の使用が日常的になった現在、最早解決したのであろうか。私にはそうは思えない。今回の展示においても、その問いは相変わらず存在しているのではないだろうか。

芸能（身体技法）の輪郭をいかに確定するか

その問いは、換言すれば、身体の動き自体をいかに精確・厳密に捕捉し、再現し得たとしても、それでその芸能（身体技法）を捕捉し、再現したことになるかということになる。

日本における芸能の研究に芸態論と環境論という大きな二つの流れが存在することも、その問いが常に芸能研究において課題とされてきたことを示している。芸態論とは、芸態、即ち演じられる演技そのもの・芸能の表現それ自体を主たる研究の対象とする立場で、民俗芸能研究・演劇学を基盤とする。一方、環境論とは、芸能を巡る歴史的社会的環境に注目し、それぞれの芸能の歴史的 position 付けや伝播を明らかにすることを第一の目的とする立場で、文化史・社会史を基盤とする。しかし、両者は二者択一ではなく、主にどちらに軸足を置くかという問題であり、実際は両者を両極として、その間の適切な位置から、両者を視野に収めつつより妥当性の高い芸能の理解や認識の実現が試みられてきた。それは、差しあたりいかにその芸能（身体技法）の輪郭を確定するかということであったといえるが、そうした試みが常に環境論（芸能史的研究）と深く関わっていることを考えただけでも、その輪郭の確定が如何に容易ではないかが理解されてくる。芸能とは基本的に歴史的な存在であり、歴史的社会的環境との関わりにおいて絶えず変化してきたので、歴史的社会的な枠組みや文脈をどのように設定するかによって、把握すべき芸態の様相は異なってくる。

伝承の過程としての芸能（身体技法）あるいは歴史の中のからだ

そうした芸能や芸能研究のあり方を踏まえて、私はかつて、民俗芸能を前例の単純な繰り返しではなく、現地の様々な出来事の発生や様々な人々の関与の中で、芸態や造形や心意など、「様々な側面において内容に変化を来しつつ再創造されて、結果として上演が実現され、それが繰り返されていくこと」（笹原 2003:304）と規定した。つまり、「からだは」元来「たいそう貧弱な骨組」で、そこに「歴史・文化という肉付きがほどこされる時、ほんとうのからだになる」のであり、「人体の歴史的・文化的外化」としての「歴史のなかのからだは、それぞれの文化が持つシステムのちがいに応じて、たいそうことなつた意味をもっている」（樺山1987:8）というわけである。

芸能（身体技法）の理解に、歴史的な伝承の過程において不斷に変化してきた「歴史のなかのからだ」という見方、即ち身体の動きを一定の歴史的文化的環境とともに把握することが不可欠であるならば、今回の展示で示された「あるく」という身体技法の輪郭の設定の妥当性に関しても、未だ検討の余地があるということになりはしないか。身体の動き自体と歴史的・文化的環境を併せた身体技法の輪郭を、今回の展示では「行為によるメッセージの伝達」（青木 2008:81）という技法によって、果たして十全に提示し得たのか。あるいは、その技法をほかの技法によって十全に補い得たのであろうか。

新芸能論・奄美大島の八月踊り・シマジマの柄

私はかつて、全ての言葉は生活における「入り用」から受容・創造された過去の「新語」で、それが「群」の「実験」と「承認」を経て定着・使用・廃棄されることで地域毎に変化を来してきたとする柳田国男の「新語論」（柳田 1969）に倣い、そもそも民俗芸能ほど変化しやすいものはなく、すべての民俗芸能は生活の場における「入り用」から受容・創造された過去の新しい芸能で、それが「群」、地域の人々の「実験」と「承認」を経て定着し、演じられ、

廃棄されることで、それぞれの地域毎に変化してきた結果、地域の人々の生活に密着した芸能として、各地に民俗芸能が伝わってきたとする「新芸能論」（笹原 2005）を提唱したことがあった。残念ながら、語呂が悪いのか、内容が悪いのか、「新芸能論」は一向に「新語」として定着していないが、そこから見えてくるのは、「歴史のなかのからだ」には、相当程度、地域的な多様性が存在しているということである。

民博では、2006年に「奄美大島の八月踊り」という長編映像番組を作成した。その中で、奄美大島の北部と南部の間で見られる八月踊りの類型的な芸態の違いを大きく取り上げた。昨年我々は、その番組の上映・意見交換会を、奄美大島各地の八月踊りの演者たちを相手に行った。その際多くの演者は、番組の視聴後に、南北に止まらず、自らのシマ（集落）とほかのシマの踊りに明確な違いがあることに気づき、自らのシマの八月踊りの独自性を改めて認識した旨の見解を表明していた。

私は、奄美各地を訪れることを通じ、それぞれの島は「道の島」として、「外の世界と繋がり、人や物や知識や情報が繁く往来した「道」であると同時に、往来した人や物や知識や情報が滞留し」、「他の奄美の島々と共通しながらも、他とは異なるこの島独自のものが、島外との繋がりの中で歴史的に形づくられて」きた「島の柄」、島々の地域的な多様性が存在していることを実感した（笹原 2006:31）が、現地上映会では、同一の島内のシマ（集落）の間でも明確な踊りの「シマジマの柄」、身体技法の次元での地域的な多様性が存在していることを、我々も島の人々も改めて認識するに至ったのである。

こうした「人体の歴史的・文化的外化」に加えて、「地域的外化」という側面を備えた「歴史のなかのからだ」としての身体技法を、今回の展示の「行為によるメッセージの伝達」という技法はどのように提示し得たのか。

観覧者が展示の彼方に見たもの

かつて、博物館における体験型展示の重要性の主

張においては、体験が観覧者に与える展示に対する興味付け・動機付けの効果の強調が見られた。私はそれに対して違和感を遂に払拭できなかった。興味付け・動機付けの次の段階の用意や配慮が、ほとんどの場合、十分とは思えなかったからである。体験の後、「観覧者は揺さぶりを掛けた自身の身体感覚の中に不安定に取り残されることになる。そこから、観覧者自身の思考に任せることを意図している」（青木 2008:83）という今回の展示では、私がかつて抱いたような違和感を観覧者が抱くことはなかったのであろうか。観覧者は、体験した後、戸惑うことなく、展示の彼方に何事かを見通すことができたのであろうか。

身体技法の民俗誌へ向けて

とはいえ、こうした様々な問題の所在は、冒頭で述べたように、身体技法の展示という困難な課題に

果敢に挑んだ今回の試みの価値を根本的に損なうものではない。そもそも私が指摘した問題は、芸能という身体技法のごく一部の領域に関するものであり、身体技法全般についても当て嵌まるか否かは別途検討が必要であろう。

今回の展示の試みは、一種の身体技法の「民俗誌」と考えることもできる。民俗誌が、何を見れば対象を捕捉し、何を記述すれば対象を理解したことになるのかを常に問いつつ、対象への接触・関与を継続し、自らの研究者としての対象への関与さえも分析の対象に取り込みながら、記述を様々に試み、更新し続けること、即ち「記述の無限階梯」を辿ることであるとすれば（小林 1991）、今回の展示も同様かも知れない。今回展示を試みた人々が、今後「展示の無限階梯」を辿っていく際に、ここで私が提起した問題が何らかのはなむけになれば幸いである。

（ささはら・りょうじ）

【参考文献】

- 青木俊也 2008 「展示をつくるⅡー「あるくー身体」の記憶ー」の実験」『場の記憶・からだの記憶 非文字資料の新天地』 神奈川大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム実行委員会 pp.80-83
- 兼常清佐 1932 「民謡の楽譜について」 民俗芸術の会編『日本民俗芸術大観 第1輯』 郷土研究社 pp.25-33
- 樺山紘一 1987 『歴史のなかのからだ』 筑摩書房
- 小林康正 1991 「「民俗」記述の無限階梯ー民俗学における対象と方法の革新ー」『正しい民俗芸能研究』0号 pp.7-22
- 笹原亮二 2003 『三匹獅子舞の研究』 思文閣出版
- 笹原亮二 2005 「新芸能論ー創出され、変化し、承認される民俗芸能ー」『新高校生の音楽3 指導の手びき』 音楽之友社 pp.96-97
- 笹原亮二 2006 「海南「極」小記」『民博通信』 114 pp.30-32
- 関一敏 2002 「民俗」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へー野の学問のためのレッスン26』 せりか書房 pp.41-51
- 竹内芳太郎 1932 「忘れ物をした飾山囃子」 民俗芸術の会編『日本民俗芸術大観 第1輯』 郷土研究社 pp.22-24
- 中村ひろ子 2008 「展示をつくるⅠー研究成果発信装置としての可能性」『場の記憶・からだの記憶 非文字資料の新天地』 神奈川大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム実行委員会 pp.77-79
- 民俗芸術の会 1932 『日本民俗芸術大観 第1輯』 郷土研究社
- 柳田国男 1969 『定本柳田国男集 第18巻』 筑摩書房
- 柳田国男 1970a 『定本柳田国男集 第24巻』 筑摩書房
- 柳田国男 1970b 『定本柳田国男集 第25巻』 筑摩書房

※本文は2008年2月24日に開催された第3回神奈川大学COE国際シンポジウム「非文字資料研究の新天地」セッションV「身体技法を展示する」におけるコメントを原稿化していただいたものである。